

67

チュプカ諸島図		
A J -15		近藤守重（正斎）
チュプカとは千島諸島のこと。近藤が、現地人に米粒で千島の形をつくらせて作成したものとされている。87×142cm		

- ◆ 近藤守重(1771－1829) は、江戸時代後期の北方探検家である。近藤は、寛政10年(1798)3月、松前蝦夷御用取扱を命ぜられ、巡察のために初めて蝦夷地に渡った。以来、寛政11年、享和元年(1801)、同2年、文化4年(1807)の4回にわたって蝦夷地に赴き、樺太から千島列島の情勢を探索した。択捉（えとろふ）島の一角カムイワッカオイにロシア人が建てた十字架を撤去して、「大日本恵土呂府」の標木を建てたことはよく知られている。
- ◆ 左上から右下にかけて大小の島々が描かれ、島の名称や地名がカタカナで墨書されている。また、島々は赤色の破線で結ばれているが、これは航路であろう。画面右側には大きくカムチャツカ半島（地図では「カモシヤツケ」と記されている）が描かれている。左下には近藤守重の直筆とされている本地図の由来がある。この末尾には「寛政十二庚申年七月廿八日 近藤重蔵藤原守重」とある。

「編脩地志備要典籍」「昌平坂」「寛政庚申」の印記がある。

68

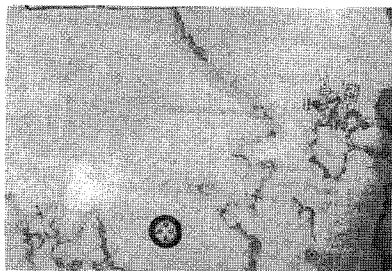
蝦夷地全図		
A J -16	安政2(1855)	
木版地図。海路、陸路の道筋や里数が明示され、里程図として作られたことがわかる。87×100cm		

- ◆ 刊行された年代には、伊能忠敬(1745－1818)や間宮林蔵(1775－1824)による、かなり正確な地図がすでに作られていたはずだが、本地図の蝦夷地はまだ異様な形態をしている。蝦夷地の外に、現在の津軽半島の一部、樺太（地図には「唐太島」と記されている）、千島列島が描かれている。蝦夷地内には陸路の里程が、周辺の島々や津軽半島の各地には蝦夷地までの航路と里程が、それぞれ詳細に書き込まれている。また、余白には松前や宗谷から各地の陸路の里程が、東部、西部、北部ごとに表にまとめられている。

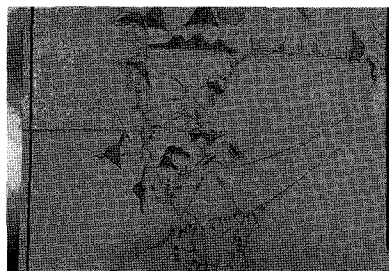
「此辺嶮山ナリ、金山アルベシ（エトモ＝襟裳岬）」「此沖アザラシ多シ（クナシリ島）」など、所々に興味ある記載がある。

「編脩地志備要典籍」「昌平坂」「安政丙辰」「静岡師範学校」の印記がある。

<参考資料> 『近藤正斎全集』（081.5-コ1）



67 チュプカ諸島図（部分）



68 蝦夷地全図（部分）